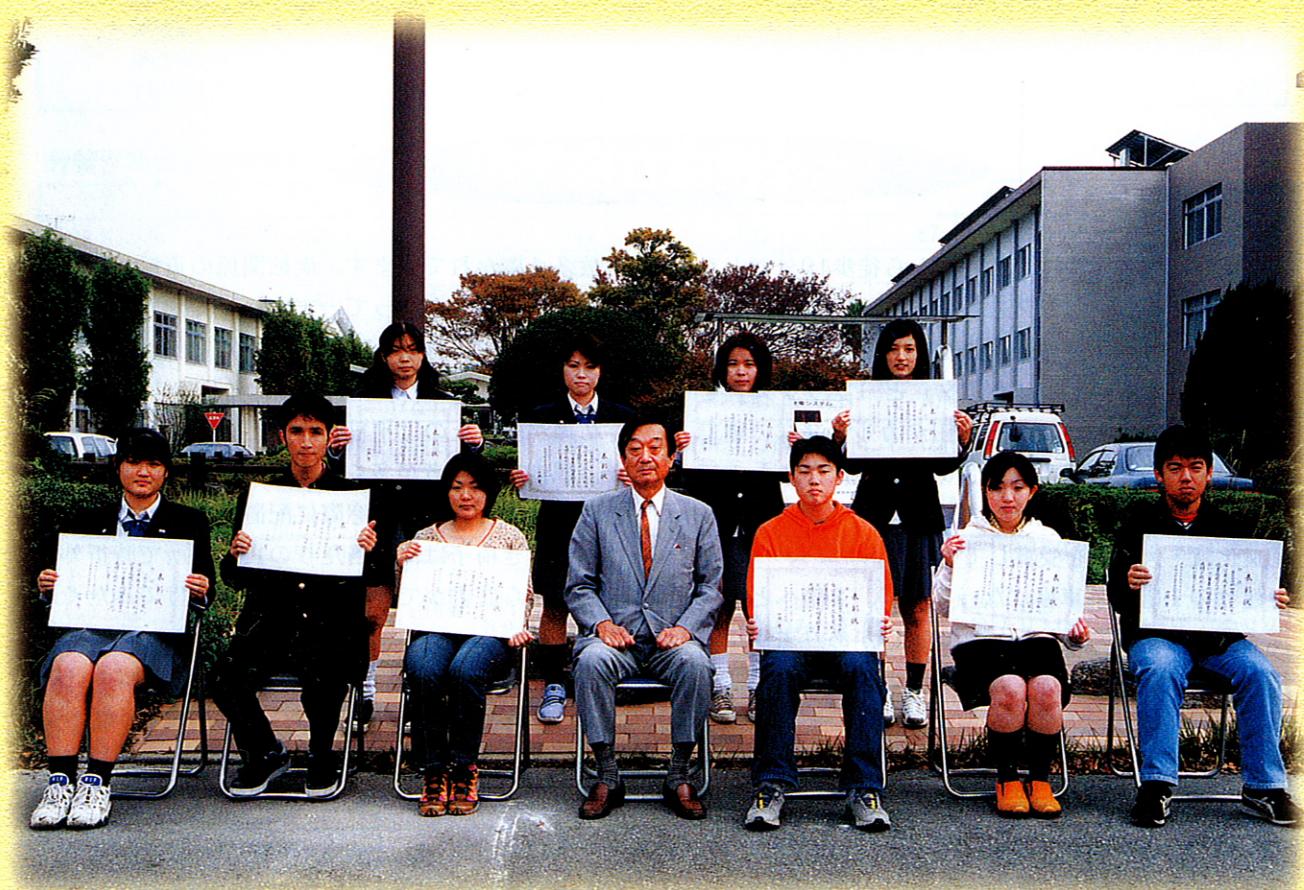


有 明 高 専

第7号
2001.12

図書館報



目 次

特集 近郊の図書館

大牟田市立図書館・瀬高町立図書館	2~3
卒業生“図書館の思い出”	4~5
お薦めの新刊書	6~7
読書感想文コンクール	8~14
入賞者	8
入賞作品紹介	9~14
審査を終えて	14
図書館統計	15
郷土の文化財・編集後記	16

特集

近郊の図書館

図書館と言えば学校図書館がイメージにわくかもしれないが、公共の図書館もたくさんある。たいていの市町村には図書館あるいは図書室があると言って良いだろう。本号ではそんな公共図書館の紹介を特集してみた。数ある近郊の図書館の中から地元の大牟田図書館と建てられてまもない瀬高図書館の2館を訪ねた。近郊には他にもユニークな図書館もあるようなので、機会があれば、また紹介することにしたい。

大牟田市立図書館

大牟田市立図書館は大牟田駅から徒歩10分のところにあり、「三池カルタ記念館」と共に「カルタックスおおむた」という複合施設を形成しています。「カルタックス」とは「カルタ」と「ブックス」を合わせた造語だそうで、大牟田がカルタ発祥の地である事から、このような特色ある施設ができたのでしょうか。平成3年に開館した建物は「福岡県建築住宅文化賞・大賞」を受賞しています。

建物の1階は駐車場になっていて、2階へと上って玄関を入れると左手に図書館の入口があります。中に一步足を踏み入れると、見通しのよい空間が広がっています。沢山の書架があって、どこから見ていこうかと迷ってしまうほどです。蔵書冊数(図書)は約29万冊、一般書や文庫の所蔵の多さは公共図書館ならではでしょう。本や雑誌の貸出に冊数制限がないのも大きな魅力です。

入口から奥までまっすぐに進むと、右側に郷土資料コーナーがあります。ここには大牟田に関する図書はもちろん、新聞の切り抜きやパンフレットなど

も数多く置かれています。炭鉱関係の資料、郷土出身の作家の著作も揃っています。漫画家の萩尾望都さんが大牟田出身というのをご存知でしょうか。萩尾さんの作品集もこのコーナーにあります。

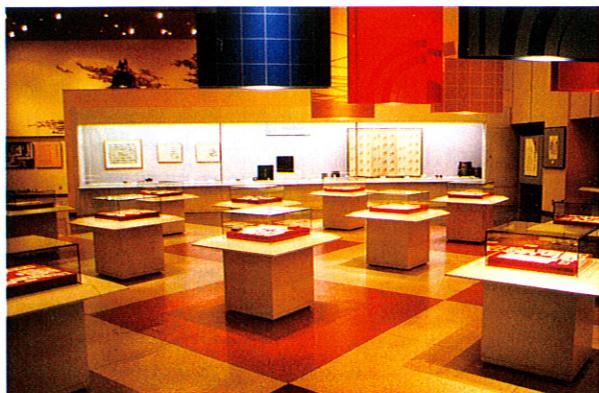
私達が訪れたのは平日の昼間だったにもかかわらず、館内は利用者が多く、空いている座席はほとんどありませんでした。窓際に配置されている一人掛けの机付き椅子は、日当たりの良い場所で時折外を眺めながら読書ができる、思わず腰かけてみたくなります。

図書館の3階には点字・録音図書室、集会室と書庫などがあります、録音図書、点字図書はかなり充実していて、その製作過程を思うと部屋いっぱいの資料には驚かされます。資料の利用も多いという事でした。

大牟田市立図書館(カルタックスおおむた)の近辺には歴史資料館、文化会館などの施設もあります。まだ行った事のないかたは、この文化ゾーンを一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



カルタックスおおむた 玄関



三池カルタ記念館 内部

瀬高町立図書館



瀬高町立図書館 玄関

国道208号を北上すると、高田町濃施のところで柳川の方に通じる208号と久留米の方に向かう209号に分かれる。この分岐点から209号ぞいに車を進めると10分足らずで瀬高町である。この瀬高町に素晴らしい図書館があると聞いて、お訪ねした。町に入るとすぐ、モダンで、斬新な建物が目に飛び込んできた。瀬高町立図書館（歴史資料館を兼ねる）である。館内に足を一步踏み入れたとき、空間の広がりと、明るいのにびっくりした。床も書架も木を用いてあるため、目にやさしい感じがするうえ、天井を高くとって、閲覧室の部分は2階まで吹き抜けになっている。加えて、書架と書架のあいだも十分に間隔をとっている。お聞きしたところ、書架の前に人が立っていても、車椅子が無理なく通れることを頭において間隔をとったということであった。とにかく、明るく、広々しているというのが、第一印象である。

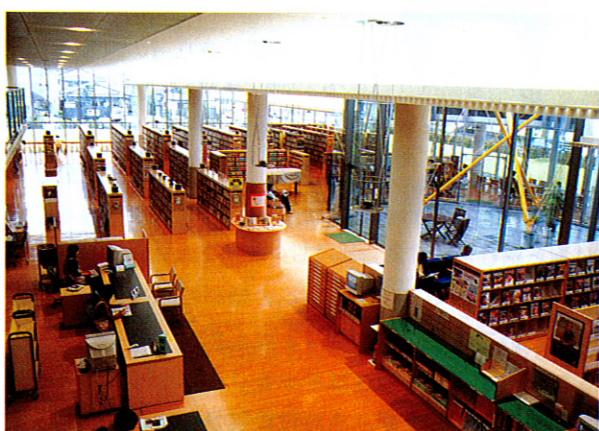
三池賢一館長にいろいろお話をうかがった。図書館の開館は平成10年とのことである。できてまだ3年しか経っていない。それ以前は公民館のなかに図書室があったそうだ。そこで、プールを取り壊して、図書館を建設することになり、設計・監理を東京大学の香山寿夫教授に依頼することになった。ちなみに、プールも50mの公式プールの立派なもので、当時（昭和29年）、福岡県には瀬高町と福岡市にしかなかったということである。オリンピックなどで活躍した

多くの有名なスイマーがこのプールで泳いでいる。そのため、この由緒あるプールをこわして図書館を建てることには多少町民の反対もあったというが、今はきっとこの図書館を誇りにしておられるのではないか。この図書館は平成11年度の「福岡県建築住宅文化賞知事大賞」および「日本照明学会九州支部賞」を受賞している。

資料も充実していて、図書室当時1万点であったものが、現在は11万点を越えている。当然、利用者も多く、人口約2万5千人の瀬高町で、利用登録者数は1万1千人を越え、開館以来の入館者数は70万人、貸出冊数は67万冊を越えている。貸出冊数に制限をもうけていないせいもあって、一度に40冊借りていった女生徒もいるということであった。

資料面での特色を館長にお尋ねしたところ、町立なので、近くの市町村史、そして町にゆかりのある与田準一、北原白秋、それから卑弥呼（邪馬台国）、幸若舞、神籠石（こうごいし）関連の資料はできるだけ収集するようしているということである。また、町の中央を矢部川が流れているので、川に関する資料も集めているということであった。

閲覧室の真ん中にグランドピアノがおいてあった。月に2回、地元の人が来て、20分ほど演奏されるそうだ。ピアノの音を聞きながら、読書するのも優雅だなと思いつつ図書館をあとにした。



瀬高町立図書館 内部



卒業生“図書館の思い出”



私はM2期生なので、小さな仮の図書室らしきものが出来た1964から1969年まで在学した。よく図書室に出かけ、いろんな本に会うことが出来た。国語の棚町先生の読書指導のお陰もあったが、その受け皿としての図書室は夢や思考（というほどではないが）を醸成する青年時代のよき空間であった。

昼休みや放課後にはよく出かけていて書棚をあちこち覗きまわって、面白そうな本を借りた。今でもよく覚えているのはガモフ（米国の物理学者）のシリーズで、宇宙のモデルなど随分興味深く読んだ。専門書や参考書も学生の私には高価な時代だったので、図書室の本をたくさん借りて随分お世話になった。1、2年の頃大牟田の市立図書館にも時々行ったが、古い本が多く数も少なかったように記憶している。それに比べ学校の図書室は年々蔵書も増え、学生のニーズに充分答えてくれたと感謝している。理科系の学校である

機械工学科 2期生 奥園 明

にもかかわらず、文学や社会科学の本もそこそこ備えてあったし、教科に関する本は複数冊準備してあったので助かった。お陰で、社会に出て30年以上経た現在でも図書館通いは続いている。現在の公共図書館はリクエストをきちんと受け付けてくれるので、納税者として、満足な状況にある。つまり、書斎などない私にとって、図書館が書斎みたいなもんで、毎月20冊以上リクエストをかなえてもらっている。特別な本は国会図書館からも取り寄せてもらえるが1度しか利用したことがない。これから図書館は利用者ニーズに応える情報倉庫の様子を呈してくると想像している。そこにはパソコンがずらりとならび、インターネット情報やオンラインデータ・ベースの検索が自由に出来、公共図書館との相互貸借も可能になるといい。もちろん、リクエストや予約はパソコンからインターネット経由で出来、リファレンスサービスもメール電話で応じてくれるとありがたいと思う今日この頃です。



美術ギャラリーの誕生やブック・ディテクション・システムの設置等、変貌を遂げる図書館に足を運ぶ度、「昔と随分かわったなあ。」と時の流れをしみじみと感じます。

私が学生の頃は、閲覧室への鞄の持ち込みが出来なかつたので、廊下にズラリと並んだロッカーに荷物を入れていました。現在はギャラリーとなって彩りを添えている廊下ですが、当時は殺風景な印象だったと記憶しています。

あの頃の閲覧室はセピア色に染まって私の脳裏に焼き付いています。当時は部活（E S S）で英語劇を上演していたこともあって、解らないままにシェイクスピア物語を読んでいたし、長編「三国志」の諸葛孔明

建築学科 13期生 森山 恵香

に夢中になっていました。孔明の底知れぬ頭脳から聞く考えに感動を覚えたものです。また、芥川龍之介や石川啄木、それに井上靖の作品も好んで読んでいました。啄木の「一握の砂」を物悲しい気持ちに浸りながらじっくり読める静寂さが閲覧室にはあって、ぼんやり物思いにふけることが出来る在り難い場所でした。

皆さんにも図書館を大いに活用してもらいたいと思います。表面だけでは見えないものを見ていく文学を通して精神形成を行うことで、より深い物の見方が出来てくるのではないかでしょうか。





「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む」とは岩波文庫の巻末の言葉である。私の図書館の思い出はこの文庫本との関わりが大きい。

学生当時の授業には文庫本を一冊全部読み通すようなものがあり、そのために図書館に揃っていた文庫本を借り、列車での通学途中に読み進めたことを覚えて

電気工学科 6期生 小路 和彦

いる。

30年前の話ではあるが、ずいぶんと図書館には通った方で、休みになると他に数人の学生と共にアルバイトとして集められ、閉架書庫の整理を手伝っていた。

アルバイトがどういう基準で選ばれたか定かではないが、それだけ多く図書館に入りしていたのであろう。幾らかの報酬を頂いた覚えがあるが、それよりもいつまでも入れない閉架書庫の中の多くの書物に接することの喜びが大きかったように思う。



卒業してから、7年。5年間の高専生活が懐かしく感じます。講義や実験、クラブ活動。体育祭に高専祭。その中でも、結構深く関わっているものがあります。図書館です。

昼休みには、1階の新聞コーナーで全ての新聞を読み（英語版は除きます）、2階の図書室で雑誌をよく読みました。記憶では、科学系雑誌ニュートンをよく読んでいたと思うのですが。とにかく、当時は本の好き嫌いが激しく、科学や歴史物ばかり読んでいました。

電子情報工学科 2期生 堀 満

でも、このときに本のおもしろさがわかったのだと思います。今では克服して、様々なジャンルの本を、1ヶ月に10冊以上読むようになりました。図書館のおかげです。

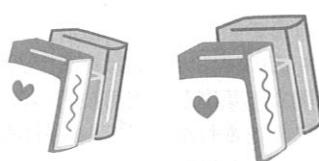
そういえば、国語の焼山先生の、ここの図書館はいい本が揃っているという言葉が、今でも頭に残っています。学生時代に図書館にある本を、もっとたくさん読んでおけば良かったと思います。今はもう、学生の時よりも自由な時間が少ないのであるから。あのころに戻りたいですね。



有明高専図書館の思い出の中でも一番最初に思いつくのは、やはりレポート地獄で家に帰れず、図書館で資料を調べ続けていたことです。とはいっても、皆で協力して騒ぎながらやっていたので、それほどつらい記憶というわけでもありません。今思えばものすごく楽しい時間だったと思います。他にもいろいろな思い出がありますが、不思議と図書館に関する嫌な思い出は浮かんできません。というのも、私にとって図書館がいつもリラックスできる場所だったからでしょう。私が入学した今から6年ほど前に、ものすごく隔離された雰囲気漂う図書室（記憶が正しければ、入り口は小さな曇りガラスが1つあるだけのドア）から、今よ

物質工学科 34期生 西田 智美

うに廊下から中の全体の様子を見渡せる明るく開放的な図書館となったのは強く印象に残っていますし、それが私の図書館好きになった理由かもしれません。在学生が充分すぎるくらい広いしているだろうなと思うと、まだ卒業してわずかですが懐かしさで一杯です。最後に、私にとって有明高専図書館は、学生時代のとても楽しい思い出が沢山在る場所です。



お薦めの新刊書



ものづくりに生きる

小関智弘 著 (岩波ジュニア新書)

自らも旋盤工として50年の経験をもつ著者が、先端企業を裏で支える小さな町工場における職人達の心の交流、および優れた技術の蓄積とその奥深さについて平易な文章で語りかける。ものづくりの本質が見えてくる好書。



感性の哲学

桑子敏雄 著 (NHKブックス)

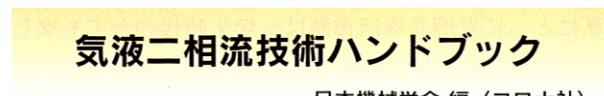
感性を理性の下位に据えた西洋的思考法では環境問題は解決できないであろうことを明らかにしながら、東洋思想を基盤に、「履歴をもった空間」への「身体の配置」という著者の独創的思想が展開される。それらの視点は環境破壊を継続しつつある現代文明にときわめて重要な対抗的視座になる。哲学と聞くと難しそうだが、意外と読みやすい。



日本人の心のゆくえ

河合隼雄 著 (岩波書店)

阪神淡路大震災、オウム事件、援助交際など、最近生じた様々な事件に対する日本人の行動現象を読み解き、臨床心理士としての著者の経験を背景に、日本人の心の在り方、日本社会の変化の本質を探った日本人の心の評論。自分の心の位置座標が少し見えてくるかも知れませんよ。



気液二相流技術ハンドブック

日本機械学会 編 (コロナ社)

気液二相流は火力発電所、原子力発電所などのエネルギー関連装置、化学プラントおよび空調機器などで見られる。これらの装置の計画や設計および運転方法において気液二相流の特性の把握は重要である。この書は気液二相流に関する基礎から実用技術への応用までにわたって体系的に記述されたもので、諸外国においてもこのようなハンドブックは類書がないといわれている。ぜひ一度目を通してみて欲しい。



エンタルピ・エントロピの基礎

松永省吾 著 (パワー社)

熱力学を学ぶとき、もっとも厄介なものが、「エントロピー」という得体の知れない物理量である。さらに、追い討ちをかけるように「エンタルピ」というすごく紛らわしい名前の量も出てくる。この2つの量は名前は似ているが、実体はまったく異なっている。しかし、逆に考えれば、この嫌われ者と仲良くなるれば、熱力学征服にあたって怖いものなしとなるはずだ。推薦したこの本は、「エンタルピ・エントロピーと仲良くなる方法」とでも副題がつきそうな一種の攻略本である。ぜひ一読して、“エンタルピ・エントロピー”とお友達になって欲しい。



じしゃく忍法帳

吉岡安之 著 (日刊工業新聞社)

「磁石って知ってる?」という問い合わせに対して、高専生なら全員YESと答えるでしょう(余りにも簡単すぎて混乱する人もいるかもしれません)。普段は気付かないかもしれません、現代人は1日十数回は磁石(厳密にいうと磁性体)のお世話になっています。それほど磁石は私たちの生活の中に形・姿を変えて入り込んでいます。この磁石の様々な性質やその応用がこの本には分かり易く書かれていますので、是非一度手に取って見てください。

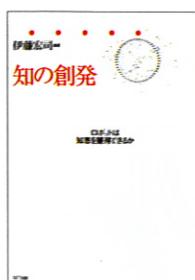


建築のアイデアを どうまとめていくか?

-もうひとつのテーマは
「都市への戦略」-

大野秀敏 著 (彰国社)

茨城県営松代アパートと東京大学における設計課題を通して、建築のアイデアのまとめ方、発展のさせ方、建築と都市空間とを関連させる方法を解説している。良い建築を生むために一読することを勧める。文字よりも図版が多く、工夫を凝らしたレイアウトになっている。当書はエスキスシリーズ③である。他のエスキスシリーズも一読してみては。



知の創発

ロボットは知恵を獲得できるか

伊藤宏司 著 (NTT出版)

人間の脳を複雑なシステムとして据え、このシステムは固定した最適構造を造り出すのではなく、常に外界に向かって開かれ、外界からの情報をキャッチしながらそれに反応して自らの姿を変えて行く性質を持つとする。本書では、このようなシステムを「創発システム」と呼び、このシステムによって生み出される機能を「知の創発」と定義する。

「知の創発」としての具体的な例としてロボットを題材とし、これと環境との間の相互作用によりロボットとしての機能が創造されてゆく仕組みについて述べている。

本書は文部科学省重点領域研究「創発的機能形成のシステム理論」の「生物的工学システム」班の研究結果を基に書き下ろされたものである。

バイオの扉

医薬・食品・環境など32のトピックス

斎藤日向 監修 森明彦 編集代表 (裳華房)



“バイオテクノロジー”は略して“バイオ”と言われていますが、最近よく耳にする割に本当の姿はよく分からぬという方が実際かもしれません。この本は、“バイオ”が応用されている各分野（「基礎」「医薬・化粧品」「食品」「動植物」「環境」）での使用例を具体的かつ平易に説明し、どのような可能性、利益がもたらされてきたか、あるいはもたらされようとしているかを解説しています。また、執筆者は、全て「生物工学」を専門とする「技術士」であり、技術者を目指す学生諸君にはお薦めです。

実験を安全に行うために 続 実験を安全に行うために

化学同人編集部 編 (化学同人)

実験は危険を伴うものです。実験の事故は予知できないが、十分な知識を持てば、危険度は予知できます。この本には、実験を行うに当たっての最も基本的な“注意”“危険物質の取り扱い”“装置の取り扱い”“実験廃棄物の処理法”および万が一の時の“応急処置法”がコンパクトにまとめられています。実験ビギナーの学生諸君にぜひ一読しておいていただきたい。



情報文明の日本モデル

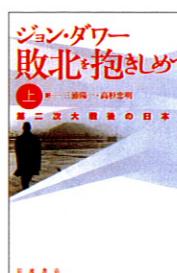
坂村健 著 (PHP研究所)

情報技術(IT)の世界ではアメリカが最先端を走り、日本はそれを追いかけるかたちが続いている。2000年になってドット・コム企業の破綻、2000年後半からのコンピュータ大手・通信大手企業の大赤字、これが日本にも波及した。

著者はこうした状況を分析し、今後の日本の取るべき方向を示す。いたずらにアメリカモデルを追いかけないで、良いことは学びながらも日本モデルを構築すべきであると言い、その提案を示している。著者は1980年代初頭より、独自OS・TRONプロジェクトを主導してきた。BTRONはアメリカの圧力もあって、日本の学校への導入・普及は出来なかったが、組み込みシステム分野向けのBTRONは大成功を収めている。又、独自のOS・超漢字は多種類の文字を扱え、アジア文化に適したOSであり、アジアでの普及が期待されている。

又、コラム欄に6冊の本が紹介されているが、いずれも一読の価値がありそうだ。

情報関連分野に進む学生・技術者に一読をお薦めしたい。



敗北を抱きしめて (上)(下)

ジョン・ダワー 著 三浦陽一 他 訳

1945年8月焦土と化した日本にマッカーサー率いる連合軍が上陸した。そしてアメリカの支援を受けながら未曾有の敗戦体験の中から復興に立ち上がった日本人の「戦後史」を根底から覆すほどの衝撃を与える歴史書が今年、世に出た。7月7日付の「朝日新聞」【天声人語】では次のようにこの書を紹介している。

〔アメリカの分裂と苦悩を自ら体験し、自国中心主義の考え方反省する中から出てきた研究者の一人、

J. ダワーさんの近著『敗北を抱きしめて』の邦訳が完結した(岩波書店)。一昨年来、ピュリツァー賞をはじめ数々の賞を受けた書だ。(中略)様々な日本人の様々な思いを細かに吸い上げて日本の「戦後」を再現した。世界でも類を見ない苦しい敗北を経験した日本人が「敗北を抱きしめて」自分を変えていく姿を、共感をこめて描く。〕

概して日本の戦後の評価については感情に流されて論じたものが多い中、この書を読み終えて、改めてこのような冷徹な視点で貫かれた歴史書で再学習する必要性を感じた。今年一押しの推薦書である。



校内読書感想文 コンクール

夏休み恒例の行事になっている校内読書感想文コンクールも今回で13回目を迎える。今年は、応募総数が飛躍的に伸びた昨年よりさらに10編増えて612編の応募があった。学生諸君の熱意・協力そして先生方のご指導の成果だとうれしく思っている。少し具体的に数字を挙げると、1年207編、2年190編、3年162編、4年37編、5年16編の計612編である。残念なのは、応募数がゼロだったクラスが4年に2クラス、5年に3クラスあったことである。それに対して、例年、概して応募数の少ない4・5年にあって、今年は4Aが30編、5Mが15編応募してくれたのは特筆すべきことである。来年は4・5年生ももっと応募してくれることを期待している。

選考の経過を簡単に述べる。1次審査はクラス担任にお願いして、各クラスあたり5編程度を推薦してもらった。1次審査を経た95編について、別に選ばれた6名の読書感想文コンクール審査委員によって2次審査を行い、36

編を選び、この36編について審査委員で最終選考を行ない、入賞者を決めた。

今年は例年なく粒ぞろいの作品が集まった。正直なところ選考に苦慮した。うれしい悲鳴である。国語の先生を始めとする先生方の日頃の指導がだんだん実りつつあるのかもしれない。もう一つ特徴的なのは、例年あまり対象とならない本についての感想文が目についた。例えば、「野火」「ライ麦畑でつかまえて」「日本人の技術はどこからきたか」など。このような傾向は大いに歓迎である。低学年はどちらかと言えば短編を取り上げる学生が多い。折角、長い夏休みを利用してのコンクールである。長いものにも挑戦して欲しい。一応こちらで50冊の本をリストアップして推薦しているが、それ以外の本についても感想文を書いてもらって一向にかまわない。どしどし色々な本にチャレンジして来年はもっと多彩な感想文を読ませて欲しい。

(図書館長 瀬戸 洋)

入賞者

■最優秀賞

機械工学科 5年 高井良祐美 「斜陽」を読んで

■優秀賞

電気工学科 5年 近藤 洋平	光抱く友よ
2年5組 東 優子	「ビルマの豊饒」を読んで

■佳作

電子情報工学科 3年 獅子原示紗	「風立ちぬ」を読んで
電子情報工学科 3年 橋本慎太郎	「地獄変」を読んで
2年1組 吉田 沙織	十七歳
電気工学科 4年 立山 茂憲	日本人技術者としての誇り
機械工学科 5年 東 大樹	山月記を読んで
建築学科 4年 山下 麻凡	光抱く友よ
2年3組 柿木 美紀	十七歳
建築学科 1年 野口 裕子	「ビルマの豊饒」を読んで

八賞作晶紹介



「斜陽」を読んで

5年 機械工学科
高井良祐美

私は、「斜陽」を読み終え、大変悲しい気分になった。というのも、物語に出てくる人物が、誰一人として幸せをつかむことなく、押しよせる戦後の時代の波の中へ飲み込まれているように感じたからだ。

この作品は、作者「太宰治」の当時の自画像を、登場人物である作家の上原二郎に投影させたものだと言われている。作家の上原は、かず子と恋仲にあったが時代の波に押し流され、やがて消えていった。よって、彼に自分を投影した太宰も幸せではなかったのではないだろうか。また、かず子の弟、直治も麻薬中毒から立ち直る事ができず生きる意欲を無くし、自殺してしまう。さらに、お母さまも病氣から回復することなく死んでしまう。息子の死からの落胆もあったのだろう。

しかし、彼ら以上に苦しみ、そして辛い思いを抱いていたのは、かず子だったと思う。彼女は以前、結婚に失敗し

ているうえ、心の支えでもあった家族も失いただ一人となつた。孤独という暗くて厚い闇が彼女を覆っているようだつた。だから彼女は、この闇から抜け出すかのように妻子のある上原二郎に「偽りの恋」を仕掛けたのではないだろうか。また、上原が消えていってしまうと予感し、彼の分身として子供を身ごもったのだと思う。何とも侘しく、心の痛くなる恋愛だ。しかし、かず子にとっては、孤独にサヨナラを言え、引き換えに愛した人の分身を手に入れた喜びでいっぱいだったかもしれない。そして、かず子の予想通り、彼女の愛した人で、彼女の腹の中の子供の父親、また、太宰治が自分自身を投影したと言われる作家の上原二郎も、戦後の時代の波の中へ消えていった。太宰治は、戦後の暗く苦しい時の中にも、わずかな希望があると信じ、物語中のかず子という人物に光を託したのではないだろうか。その光こそが、「斜陽」かもしれない。それは、西に傾く日の光で、後には、暗く冷たい夜の闇が続くけれど、それを脱け出せれば、まばゆく美しい朝の光が待っている。朝のこない夜はないように、「斜陽」とは希望に通じる道筋だと言っているかのようであった。

私は、この物語で、孤独に耐えきれず、崩壊していく人間のはかなさや弱さを感じた。しかし、そんな中で、たつた一人で耐え抜こうとしている女性の姿を見て、いつしか希望をつかみ取れる事を願い、本を閉じた。



光抱く友よ

5年 電気工学科
近藤洋平

この作者の作品には、友情をテーマとした作品が多い。この作品もその一つである。

この作品は、同じクラスの松尾勝美との触れ合いと「別れ」をきめ細かく描いたもので、その中に風景描写も交えて、とても綺麗な、そして余韻の深い作品だと感じた。友達といつてもうわべだけでつながるものではなく、主人公涼子はまるで初恋の人を追い求める時のような感情を傾けて、彼女との日々を生きる。

『うちは、なんで松尾さんみたいな皆がよく言わんひとに近づいたんか、自分でもわからん。ただ松尾さんは、これまでの17年間、うちの心がきちんと片づいたところを引っくり返したんよ。何が上等で何が下らないか、何が正しくて何が間違ってるか、わからんようになってしまった。』

私はこのくだりをよく読み返した。そして思う。この「松尾さん」というのは本当に女性なのだろうかと。ひょっとしたら異性ではないのかと、確かめたい気持ちになった。

これは友達に向ける語りではなく、恋人へ向けるものではないだろうかと感じられたからだ。もちろん「松尾さん」は女性であるが、それを疑わせる程に、ここでの友情は恋愛感情と近接している。17歳という思春期においては、人をひっくり返すのは、大抵恋愛である。男も女もそうだろう。ところがこの場合は、恋愛が人をぬり覚えるのと同じ力で、友情によってめぐり返されているのだ。本文では相手の女性を「松尾」と表現している。まるで男の姓を書くように。松尾勝美という名前があるのだから「彼女」とか「勝美」とかでいい筈なのに、ずっと「松尾」で通している。些細なことかもしれないが、こんな所にも作者の人間の見方、感じ方が滲み出ているように思う。こうした感性や態度は、ある人には古風な印象を与えるかもしれないが、しかし実はそこそくがこの作家の世界を考える場合に見過ごしてはならないところだと思う。

友達と付き合うこと。つまり他人の心の壁に目を向けていくことはとても難しいことで、根気のいることである。しかしそこで見出したものはいい意味でその人の中に深く長く根を張っていく。としても、一人の友は決して捨て石ではない。それは後からやってくる恋愛や人生の礎になる、というような単純に便宜的なものであってはならないし、またありえないことである。いつまでも一人の友を、「抱き」続けるということ。この律儀さが現代社会の私達に最も必要なことではないかと思う。



「ビルマの豎琴」 を読んで

2年5組
東 優子

この作品の舞台であるビルマに、私の祖父も戦時中日本兵として渡りました。だから私はこの本を読んだら、あまり多くを語らない祖父の戦争体験を少しでも知ることができるのでないかと思い、この「ビルマの豎琴」という本を手に取りました。

実際に読んでみて、ビルマ戦の悲惨さもありありと感じたのですが、それ以上に考えさせられる所が多くありました。それは人間としての心の問題です。

この作品の主人公である水島上等兵は一人、隊長から指令を受けました。その任務を果たし、捕虜となった隊長や戦友たちの下に帰るためカチン族の部落から、ムドンの町に向かいました。その際、水島は見てしましました。そう、たくさんの日本兵の無惨な屍を。そんな光景がありとあらゆる場所で、水島を待ち受けっていました。水島は放っておくことができませんでした。この同じ日本人の屍をそのままにして、自分だけ日本に帰ることはできないと思ったのです。水島は隊にも日本にも帰らず、一人ビルマに残り屍を葬って、安らぐ所を作つてあげる事を決めました。

私はこの水島の決意は信じられませんでした。激しい戦

場でせっかく生き延びて、日本に帰れるというときに。しかし、同じ人間として考えると、やはり避けては通れない道なのではないかと思います。このたくさんの屍の家族の身になって水島は考えたのです。水島は自分の幸せを捨てて、ビルマで死んだ人々のために尽くす心は本当に胸を打たれました。そして、その水島の行動から、私は当時のビルマから帰国した日本兵の心のうちに触れたような気がしました。死んだ多くの仲間のことを考えなかった人はいないと思います。一歩違ったなら自分がその立場だったのだから。水島は本当に実在する人物ではありませんが、戦後ビルマで戦った多くの兵士達すべての人の心だったと思います。著者はそう思い水島という人物を作り上げたのだと私は感じました。

私がこの本を読んでいくうちに耳が痛い言葉がありました。それはビルマ人と日本人を比べた水島の手紙の一文です。ビルマ人は確かに遊び過ぎたり、投げやりだけれど、いつもニコニコ笑っていて欲が無く心静かな人達。一方、日本人は戦争に負け苦しんでいるけれど、それは無駄な欲を出したから。人間として最も大切なものを無くしている。この言葉は戦後のことを言っているのだろうけれど、今の日本人にも値すると私は思いました。私達は欲を持ち過ぎている気がします。私の生活を振り返ってみるだけでも、思い当たる節がかなり出て来ます。

私は人間として正しい生き方、人間らしい生き方をこの本に、水島上等兵に教えてもらった気がしました。今度、ゆっくりと祖父にビルマ戦での体験を聞いてみようと思います。



「風立ちぬ」を 読んで

3年 電子情報工学科
獅子原 示紗

私はこの本の中に出てくる「節子」という女性にすごく興味を持ちました。それは、彼女の考える「死」と「生」に惹かれたからなのかもしれません。

彼女は主人公の恋人でした。彼女は病気にかかっていました。彼女は最後まで彼を愛していました。彼女は、愛されながら天に召されたのでした。

私は最初、彼女は「生きているのに『生きて』いない」という印象を受けました。それほど「生きる」ということを、私は彼女から感じることができなかったのです。ただひたすらに「死」という時を待ち、それを恐怖すら感じずに、それを運命だと悟っているのだと、私は思いました。けれど彼女はこう言ったのです。

「私、なんだか急に生きたくなつたのね…」

「あなたのお蔭で…」

これは、彼女が山中の療養所に入ることについて、主人公と話をしていたときに言った言葉です。私はここで初めて、彼女の「生」への執着と人間らしさを感じたのです。

私はどこか、彼女に疑いを感じていました。それは、本

当に彼女は「死」を待っているだけなのか、という点でした。けれど彼女は、「生」への関心を持ち始めたのです。私の疑問はさらに大きくなりました。だから私は考えました。もし私が彼女だったら、と。

生きることよりも、いつ「死」という時が私のもとに訪れるのだろうかと考えたとき、一つの言葉が私の頭に浮かんだのです。それは「諦め」です。病気にかかり、いつでも心の中に「死」という言葉があって、そして彼女は「生きる」ことを諦めることにしたのではないかという結論を、私は出しました。

そうやって考えると、もしかしたら彼女は「死」という終末を待っていたのではなく、「生」へと向かう気持ちを奮い立たせる何かを待っていたのではないかと思うようになりました。一番「生」に執着していたのは彼女自身で、それはきっと最初からそうだったのではないかでしょうか。

彼女は「生」への気持ちを「死」という全く逆の立場に置き、諦めることで「生」への執着を取りはらい「死」への恐怖を失わせたのではないかでしょうか。そして主人公を想う気持ちから、ずっと待っていたモノを手に入れ、夢を見たのではないかでしょうか。

私は、私なりの彼女の形をつくっただけで、本当は全く違う人である可能性のほうが高いのかもしれません。けれど彼女は今、この本の中で「生き」続けているのではないかでしょうか。彼女が一番望んでいたことを、このような形で叶えてあげたい、私はそう思いたいし、思っていたいです。



「地獄変」を 読んで

3年 電子情報工学科
橋本慎太郎

人間とは常に何にでも境界線を作りたがるものである。自分にとっての基準を設けて、そこで自分をコントロールしているように日々感じている。

初めて、この「地獄変」を読んだ時、自分の娘が殺される場面を描くという行為は単純に恐ろしいとしか思えなかつた。しかし、何度か読んでいくうちにそのこと自体はそんなに重要ではないと考えるようになった。そこでそう思うきっかけとなった主人公の良秀の描写について見てみることにする。まず、良秀はその事件の後、娘を失った苦しみに耐えられずに自殺してしまうことから、娘に対しての道徳感はきちんとあったことがうかがえる。

ならば、何故焼死する前に助けに入らなかつたのだろうか？それはきっとその時彼の中で芸術と倫理感の間にある不等号が芸術の方に傾いていたに違いない。この文章を見ていくと、良秀の芸術に対するこだわりが怖いほど出てくる。ほとんど常軌を逸しているといつてもおかしくない。彼に境界線というものは存在しないのだろう。

しかし、そこで思うに良秀は境界線を“作れなかつた”

のではなく“作らなかつた”的ではないか。そのどこか計算された行動や口調、態度から察するに、彼は敢えて理性を捨てて芸術を取つた、そんな印象を受ける。

だが、そう考えると一つの矛盾が生じてしまう。本来芸術という概念は理性の上に乗っかっているはずである。つまり人々の衣食住といった基本的な生活の中にゆとりといったものが生じ、その心の余裕から文化は生まれてくるという事だ。そんな理由から、こんな人間は存在するはずがないのだ。しかし、この奇妙ともいえる食い違いがこの物語の世界観を象徴している。何故なら、この矛盾が成り立つてこそ、この話は意味が出てくると思うからだ。

一つのずばぬけた才能を持つ人がいたとする。この社会ではそれを精一杯出そうと思っても理性を超えてまで出すことは決してできない。それをこの話では限界までやってみせた。理性を越えた本能によるアート。空想の中だからこそ描くことが出来たミラクルワールド。そんなところだろう。僕は、この話は人間の才能の限界の一つを表した作品、それ以上でもそれ以下でもないと捉えている。だから恐ろしいという感情なんて必要なかったのだ。この物語に対して、リアルを感じる必要もなく感情を込めて読む理由もない。そんな風に読むと、頭がついていけない。したがつてこの人物に共感を覚えることもない。結果を見せただけの作品。それでいいではないか。僕の考えが正しいとか間違いだとか、そんな事もどうでもいい。だって、それを決める境界線を引くのは自分自身なのだから。



十七歳

2年1組
吉田沙織

「17歳」このくらいの年は、大人でもなく子供でもない時で、精神的に不安定である。だから、現実に事件を起こす17歳がいる。しかし、同時に気持ちが大きく揺れ動き、大人へ成長していく大事な過程でもあると思う。17歳になろうとしている私にとって、この作品は多くの共感と驚きがあった。

著者の井上路望さんの家族は、親が離婚していて、母と少し障害のある兄の3人で生活している。著者は小学5年生でいじめに合い、先生に相談するが、冷たく対応されたことで、大人に対する反発心を持つようになる。また、中学校でも一時いじめに合い精神的に苦しくなるが、常に子供の味方になって考えてくれる母がいた。カウンセラーの先生に相談したのも気が楽になり、すばらしい大人もいることに気付く。このいじめを乗り越えたからこそ現在の著者が存在するのだと思った。この苦しい時の母の助けは本当に大きいと思う。私は、いじめに合ったことはないが、この時の不安な気持ちはわかる気がする。不安な時ほど味方になって考えてくれる人が必要で、味方がいれば、強く前向きに考え、乗り切るためにエネルギーが出てくるだろう。

著者の大人に対する反発は、このことからだけ生まれたものではない。中学での生活指導もその一つだった。「個性の尊重」と言っているわりに髪や服装などに規則があり、独創的な意見も「常識」という一言でつぶされる。この矛盾は私も共感した。というか、気付かされた。私は今まで、規則は規則だから仕方ないと最初からあきらめていた。この矛盾は大人がつくり出したものだから、大人に反発するという気持ちも生まれてくるだろう。

高校生になった著者は、悩みが友人関係にあった。周りの人のことを気にしすぎていた。大好きなバスケットも部活で楽しんでいたが、人間関係がうまくいかず辞めてしまった。しかし、辞めたことで、自分は今まで周囲の反応を過敏に受けたことに気付き、自分は自分であると考え直したのでよかったと思う。

部活を辞め、時間が余っていた著者に母から17歳の誕生日プレゼントとして夏休みのアメリカ旅行が送られた。その旅行で著者は新しい友人と出会い、みんながそれぞれ自分らしく生きたいと思っていてそれを行動している。著者は見失っていた自分自身を思い出し、自分自身で歩きだした。私は、もうすぐ17歳になる。その私が読んで、理想が高すぎると思う部分があった。これは人それぞれ違うだろう。しかし、この理想と現実のギャップが、大人と子供の間の私たちの悩みの一つではないだろうか。自分から一歩を踏み出すことがとても大事で、勇気のいることだと改めて思った。私が私らしく生きるために第一歩を自信を持って踏み出すことのできる自分になりたいと思う。そして、そうなった時にもう一度この作品を読もうと思った。



日本人技術者としての誇り

4年 電気工学科
立山 茂憲

私は、今日「日本人の技術はどこから来たか」という本を読んだ。この本が出版されたのは1997年。つまりバブル崩壊後であり現在でもそうだが、日本経済が冷え込んでいる時である。技術の研究というのは、学校等でも行われているが、やはり企業によるものが大きいだろう。だが収益が大幅に減った企業にとっては開発費も削減しなければならなかつたはずである。ところが、バブル崩壊後も各分野の発展は目覚ましいものがあり、特に電子機器やIT関連の技術は常に日本がリードしていた。そのような強力な日本人の開発力のルーツを解説してあるのがこの本である。

先にあげた電子やITの技術もそうだが、私はこの本を読んでなぜ日本が不況の中でも世界をリードする技術開発ができたのか、その理由が予想できた。それは、多くの日本人がコンプレックスを持っているであろう「もの真似上手」が本領発揮したのだ。最近10年間を振り返っても技術革新による全く新しい分野の開拓はあまり起こっていないようである。このことが、技術の応用得意とする日本が生き残れた要因の一つだと私は考える。

私はこれまで、日本の技術は欧米のものをとり入れて発展してきたのだからあまり自慢できるものではない、と思ってきた。だが、この本を読んで思い起こしてみると、稲作や製鉄等、現在の生活の基礎となっている技術さえも太古に外国から渡ってきたものだ。つまり、外国の技術を導入するということは、もはや日本の国民性の一つだろうと思う。そう考えた時に日本人の応用力の高さを誇りに思うと同時に、抱えていたコンプレックスを消すことができた。

本の中に「不易流行」という松尾芭蕉の芸術論が紹介されている。私はこの言葉が強く印象に残っている。例として「不易」の象徴が伊勢神宮、「流行」の象徴が法隆寺があげてあるが、私も確かに技術においても「不易流行」の原則が重要だと思った。私はまだ、技術者として社会での経験を積んでいないため、どれが「不易」でどれが「流行」かは分からぬ。大まかに予想するしかない。だが、今後私が技術者として働き始めた時に、「不易流行」の言葉を見極める楽しみができたことは大きかったと思う。

この本は、前半が日本の技術の歴史、そしてその特徴が書かれており、後半は日本の技術史に大きな影響を与えた人々の半生が紹介してある。私は特に前半部に強く惹かれた。日本人が「もの真似上手」であることを誇れるようになった。私が技術者として働き始めても恐らく不況は続くだろう。だが、この誇りを日本人技術者全員が持つことができれば日本の技術は衰退することはない、と胸を張って私は言うことができる。



「山月記」を 読んで

5年 機械工学科
東 大樹

私がこの作品と出会ったのは、たまたま流し読みした雑誌の挿絵の龍虎図に目が止まった時でした。初めは挿絵を何回か見たが内容が気になり読みだしてしまいました。

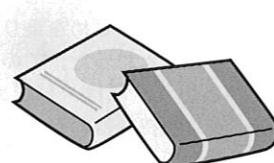
「山月記」は普通の小説ではなく、人間が獣などの異類に変わる変身譚であるが、変な話と片づけるのではなく、自分の中の「虎」に共感を覚えるはずです。私の中にも潜む何かが虎であり、心の姿、精神のあり方であるとも言えます。

この作品は人間関係の作品以上に、読み手に深い問いかけをします。人間の不条理、自分自身の存在意味、自分自身であるのが不安のような感じ、今までの常識が突然あいまいになり、すべてが信じられなくなるような。誰れもが一度は考え、悩み、苦しんだ問題、しかし、その時出した答えはあいまいなものであったり、周りに流されたものになつたりと、正確な答えは出なかつたはずです。このことを著者は虎に例えることにより、言葉ではなく、イメージとして読み手に教えてくれたのではないでしょうか。私も人生について考えたことがあるが、この人生を考えるとい

うのが人生であり、人生そのものはただの言葉で意味がないのではないかと思います。

また、この作品ではこのような人間の因果応報を別の言葉の臆病な自尊心や尊大な羞恥心として表わしていますが、この矛盾した表現こそ人間の本質だと思います。誰もが各個人の人生では、水面に映る影ではなく、水面を波立たせる魚のはずであるのと同時に、その意志が臆病な自尊心であり尊大な羞恥心であるはずです。自分を美化するのではなく、自分を保護するのではなく、磨き鍛えることにより魚に近づけるのではないかと思います。

私は人生の壁にぶつかると、その壁しか見ずに臆病な自尊心が出来てしまいますが、この作品に出会ってからは、目の前の落ち葉を見るのではなく、森全体を見て何かに心がとらわれないようになります。この作品を、みんな読んで悩んでもらいたいです。





光抱く友よ

4年 建築学科
山下 麻凡

私の周りには様々な人間がいる。あなたの周りにも、自分とは全く異なる性格をもつ人物が大勢いる事でしょう。—十人十色—育つ環境が異なれば当然育つ人間の心も異なる。一方は優等生、もう一方は不良少女…。こんな2人の全く異なる関係を私生活の中から生まれた学校での、2人のそれぞれの位置を通して描かれた、そんな作品である。

涼子は大学教授を父にもつ優等生。引っ込み思案な性格で、頼み事をされると嫌とは言えず、つい引き受けてしまう。涼子はそんな自分に、少し嫌気が差していた。はつきり自分の考えを言えない…。彼女は、私の目には“周りの目”をあまりにも気にしているように思われた。そして、そんな涼子は、中学時代の私とよく似ていて、私はすぐさま彼女に共感したのである。彼女の気持ちはよく分かる。行動したいのに、周囲を気にする余り、その気持ちは瞬く間に踏みにじられ、“優等生”という壁を超えない悔しさ…。自分に正直でいたいのに、それすら許されない、

何とも悲しい現状である。そんな毎日に突然差し込んできた一筋の光は、涼子にとって、全く未知の世界であり、不良少女、勝美との出会いは、自分を変えるチャンスでもあった。

勝美はアル中の母を持ち、家事一斉を受けもっている為、満足に学校にも行けない。そんな生活から生まれた性格のゆがみは学校でも、ひときわ目立つ存在であった。しかし、涼子はそうは思わなかった。確かに見た目も中身も、あまり友達はできそうにない感じで勝美自身も周りに対して厚い壁をつくっていた。しかし、話してみると、あまりにもその性格は大人びていて、その容姿に、言葉に、振る舞いに、涼子は小さな魅力さえ感じていたのである。

勝美と涼子—不良と優等生…。社会的立場は違っても、2人には、それぞれのもつコンプレックスをお互いにかい合える、そんな関係がいつしか築かれていたのだと思う。自分と全く異なる世界で生まれ育った人間と知り合える程幸運な事はないのかもしれない。のぞけなかった世界に足を踏み入れる事で、新しい自分を発見できるかもしれないのだから…。

この本は、私にも勇気を与えてくれた。“もっと色々人と知り合う事が大切だ”と。自分の殻に閉じ込まるにしては、あまりにももったいない学校という場所…。あと1年半。卒業するまでに、私は何人の友達をこの有明高専に残す事ができるのだろう。夏も終わり新しい季節へ向けそんな期待で胸を膨らませている。



十七歳

2年3組
柿木 美紀

私は、16年間の中で多くの感情を見つけ、又多くの発見や学習をしてきた。この本の作者である井上路望さんも17歳で多くの事件や感情にぶつかり、そのたびに解決して今の自分を作り出していた。いじめや偏見などを受け母子家庭の彼女は、そんな中で強い意志と負けず嫌いな性格で自分のこと友達のこと大人のことを真剣に考えるという自叙伝だった。

まず、私はこの本と共通だった点は、部活が好きであること、そして一番にこの世の中に何か不満があることだった。高校生を見る大人の偏見や、流行に流されているだけの私たちが、

「21世紀は君たちの時代だ。」

といわれて背負っていけるのだろうか。私の心のどこかでは、まだ大人にわかってほしい、私たちの気持ちを受け止めてほしいという気持ちが残っているような気がする。外見は大人のように背伸びしてがんばっている高校生も、本当の自分は何が何だかわからない一生懸命自分を探している。それを気づいてほしい。彼女も私と同じ考え方で私た

ちの危険信号をわかってほしいと言っている。幸い私も彼女も、何でも真剣に相談にのってくれる大先輩の母がいる。ちょっとした表情や心情に敏感に気づいて何気なく私の悩みを聞いてくれる。そして、彼女よりもっと幸いなことは、私には父がいることだ。私の父は母と同じくらい子供の気持ちに敏感だ。そんな両親の下で育った私は、今の高校生の気持ちとは違うかもしれない。ギャルや厚化粧はやるつもりはない。しかし、同じ16・17歳の悩みは、同じだと思う。はやく大人になりたい一方で今の大人たちのようにはなりたくない、という矛盾した気持ちが渦巻いているものが高校生のような気がする。

しかし、私が彼女と意見がただ一つ違っていた所は、今私たちちは大人だけが悪いのではないということだ。彼女は、大人が悪いと言っているが、私は私たちにも責任がある気がした。大人ではないけれど、責任感・判断力は17年間で発達してきたと思う。それをフルに使い、自分で解決の道を開いていくことも大人になる前の一步だと思う。その中でアドバイスや相談をもらって自分なりの考えを出すことは、次に同じことがあっても解決できる自分への財産になるのではないだろうか。

このように、私はこの本で自分の今の心情や感情がコントロールできなかったものが、整理できたような気がする。17歳は、みんな同じ悩みを持つのだとわかって、ホッとした気持ちもあった。これから、大人に近づくにつれて心情は変わると思う。しかし、今の17歳の気持ちは大事に残しておきたい。



「ビルマの豊饒」 を読んで

1年 建築学科
野口 裕子

戦争——それは人間が生み出した最も愚かで、醜い非人間的な行為である。

戦後56年目の今日、我国日本は戦争を思い出させる影もないほど社会は復興し、平和な国となった。しかし、「戦争の悲惨さ、残酷さといった悲しい痛みを、決して私達の心の中から忘れてはならない。そして、二度とこのような過ちを繰り返してはならない。」

そう、この物語は戦争を体験していない私の心に激しく訴え、戦争とは本当に無意味な行為であるということを実感させてくれた。

「お~い、水島、一緒に日本に帰ろう！」

「——ああ、やっぱり自分は帰るわけにはいかない！」

今でも、この二つの叫び声が私の胸を打つ。水島が仲間に送った、「自分は帰るわけにはいかない。」という言葉には、自分を犠牲にしても死んでいった多くの日本兵を見捨てる

ことができない、という彼の切なく苦しい心の葛藤全てが込められているように感じた。どれほど彼は仲間と共に日本に帰りたかったであろうか。遠い異国の地に一人残るということはどれほどつらく、惨めであっただろうか。私ならば、このような状況の中で他人のことまで思いやれる自信はない。私は水島の誠実さや仲間を思う心の深さ、そして彼の決意に感嘆せざにはいられなかった。しかし、それと同時に、彼の選択した道が私にはとても悲しく感じられた。水島が自分の希望を捨ててまで、戦い散っていた多くの戦友を供養することに一生を捧げる、という決意も行動も、彼の苦しみも何もかもが、戦争によってたらされたものだから。

「戦争という惨劇を二度と繰り返してはならない」これは我々人類にとって永遠のテーマであり、最大の難問である。その難問を世界が一体となって解決した、その時こそが、私達が住むこの地球に平和が訪れる日であろう。

21世紀に入り、これから戦争を知らない世代が増え続けていく中で、私達は戦争のもつ恐ろしさを途絶えることなく語り継ぎ、「人間が人間らしく生きること」の意味を問い合わせていく必要があると思う。そして、あらゆる視角から戦争を見直していかなければならない。

耳を澄ますと、水島上等兵の奏でる美しくも悲しい音色が聞こえてくるような気がする。

審査を終えて

一般教育科 焼山 廣志

我々は日々の生活の中で書物との邂逅があり、その軌跡を文字という手段を使って文章に綴ることがある。書の世界に今の自分の心情を重ねて共鳴し得るものを探し得た書き手の文章はそれを読む者にも大きな説得力をもって迫ってくるものである。今年も40篇弱の選ばれた読書感想文を審査しながらこの事実を再認識した。とりわけここでは、どんな書を搜し得たのかが重要になってくる。なぜなら書を通して「自分」を語ることになるからである。

今年のノミネートされた感想文中に名作と言われる文芸作品と並んで、今の年齢だからこそ読む気になった「旬」の作品。『十七歳』『夏の庭』などを取り上げたものが目立ったのは、何か考えさせられるものがあった。

一般教育科 村岡 良紀

「鼻」、「地獄変」、「こころ」、「夏の庭」等の感想文は例年どおり多数あり、その内容も非常に充実しているようです。その一方で今年から推薦図書入りした「十七歳」の感想文が最終選考まで残ってきており、その感想文に学生諸君の現在の気持ちがストレートに現れているようでした。

推薦図書の中には、感想文は書き難いが非常におもしろい本も含まれています。是非冬休み・春休みを利用して、このような本を読んでみてください。

一般教育科 岩本 晃代

今回は、対象となった作品が多岐にわたっているのが印象的でした。推薦図書が全般的に浸透してきたのでしょうか。嬉しく思いました。

感動を言葉にし、それを原稿用紙に文章として組み立て行くのはとても難しい事です。それは作家が小説を書くことと同じ。ですから出来上がった感想文もひとつの「作品」です。よい「作品」をつくるためには、感覚を磨いておくことと同時に、書く方法を身に付けておくことが大切です。入賞作には、それぞれの「書き方」が活かされていますので、ぜひ参考にしてください。次回のみなさんの「作品」を楽しみにしています。

電気工学科 浜田 伸生

作品を読んだ多くの学生諸君が、物語を読み進める中で、その物語の流れの表層ばかりではなく、文章の行間から作者の心の動きあるいは心情を読み取り、かつ内面を捉える力を持っていること、また同時にその感想を立派に文章構成できる力を有していることに改めて大きな驚きを覚えました。

機械工学科 田口 純一

推薦された36編のうち「夏の庭」「高瀬舟」が各5編ずつ、地獄変3編も加えると1/3が「死」を題材にした作品で、生と死について関心が深いことがわかる。身内の人の死去などから関心をもちこれらの作品を選んでいるようである。次はやはり同年代の悩みが主題の「十七歳」や「光抱く友よ」が多い。戦争の悲惨さ、恐怖にも関心があり、少ないながら「技術」についての作品も読まれている。総じて自分の人生について考え、学習しようという姿勢が見られる。

図書館統計

平成12年度利用状況

開館日数265日

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	18	24	26	23	15	24	25	22	23	21	23	21	265
入館者数 総数	4,609	6,828	8,148	5,045	1,812	8,013	6,051	5,028	6,565	6,066	6,917	3,551	68,633
(内夜間)	(572)	(902)	(1411)	(532)	(0)	(1335)	(897)	(850)	(879)	(1155)	(1084)	(55)	(9672)
(内土曜日)	(58)	(154)	(304)	(145)	(0)	(331)	(317)	(174)	(202)	(183)	(308)	(0)	(2176)
1日平均	256.1	284.5	313.4	219.3	120.8	333.9	242.0	228.5	285.4	288.9	300.7	169.1	259.0
貸出冊数 総数	414	784	703	525	206	740	643	513	526	555	497	187	6,293
(内夜間)	(92)	(227)	(166)	(157)	(0)	(186)	(116)	(139)	(154)	(167)	(131)	(4)	(1539)
(内土曜日)	(9)	(34)	(51)	(29)	(0)	(32)	(62)	(38)	(25)	(19)	(58)	(0)	(357)
1日平均	23.0	32.7	27.0	22.8	13.7	30.8	25.7	23.3	22.9	26.4	21.6	8.9	23.7

分類別図書貸出冊数の推移

年度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合計
平成8年度	215	125	235	264	1,141	1,992	100	530	57	1,720	—	6,379
平成9年度	310	112	97	106	896	1,926	68	412	57	1,111	—	5,095
平成10年度	625	93	111	78	1,073	2,327	96	347	88	1,253	—	6,091
平成11年度	401	97	236	137	931	2,838	184	656	95	1,507	546	7,628
平成12年度	232	102	180	122	784	2,391	101	209	52	1,124	996	6,293
平均	357	106	172	141	965	2,295	110	431	70	1,343	771	6,297

*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。H.10年度以前は集計していない。

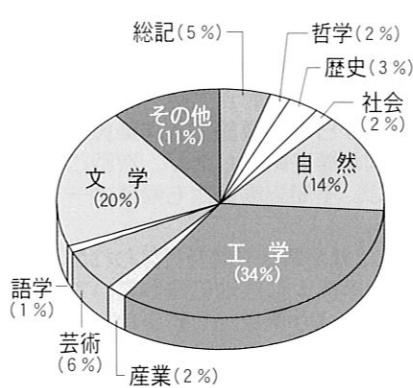
利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況			入館者数		貸出冊数			1日当たりの数値		1人当たりの数値 ** 利用者 1人当たり貸出冊数		
		総数	(内学生)	(内教職員)	* (内学外利用者)	総数	(内夜間・土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間・土曜日)	* (内学外利用者)	1日当たり入館者数		
平成8年度	244	1,225	1,039	186	—	62,730	4,690	6,759	6,379	1,865	—	257.1	27.7	6.1(8.2) 5.5
平成9年度	277	1,254	1,036	180	38	74,665	10,717	5,467	5,095	1,424	194	269.5	19.7	4.9(7.9) 4.4
平成10年度	275	1,282	1,038	193	51	81,766	12,354	6,596	6,091	1,599	105	297.3	24.0	5.9(7.1) 5.1
平成11年度	275	1,312	1,038	185	89	81,366	14,229	7,628	7,013	2,352	112	295.9	27.7	6.8(—) 5.8
平成12年度	265	1,216	992	156	68	68,633	11,848	6,293	5,813	1,771	100	259.0	23.7	5.9(7.9) 5.2

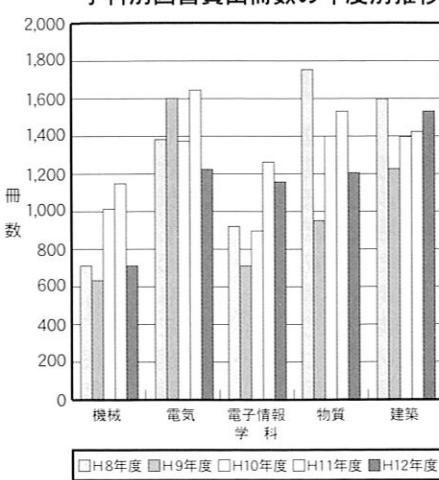
* 平成9年度から一般開放を開始した。

** () 内の数値は、全国の高専の平均値である。(平成11年度は未集計)

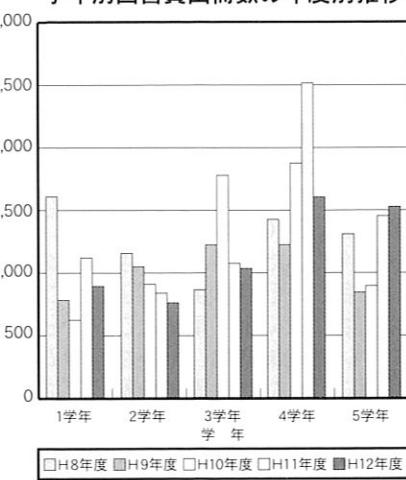
分類別貸出冊数割合
(平成8年~12年度平均)



学科別図書貸出冊数の年度別推移



学年別図書貸出冊数の年度別推移



郷土の文化財

熊本県立玉名高等学校 本館・前庭池・正門

昭和12年 登録有形文化財 玉名市中1853

平成15年に創立100年を迎える玉名高校は明治36年4月熊本県立熊本中学校玉名分校を始まりとします。明治39年には独立して熊本県立玉名中学が開設されました。

鉄筋コンクリート造3階建の当建物は玉名中学校本館として昭和12年5月14日に落成式が行われました。設計者は熊本県学校營繕技師近藤良馬です。

本館西寄りに車寄が設けられ、その上部には6本の柱型があり、頂部に尖塔を据えて柱型の間を校章で飾っています。その部分は東端の時計塔とともに壁面の単調さを効果的に崩しています。

時計塔の階段の側面壁の小さなアーチ窓、南側の1階の踊場から3階まで続く縦長のアーチ窓にはステンドグラスを嵌めています。

現在、本館1階には事務室・校長室・会議室、2階には職員室・教室、3階には教室があります。建築的質が最も高い部屋は校長室で、戦艦三笠の艦長室を参考にしたと伝えられています。西面のマントルピースには76mm角と24mm角の黒色タイルを貼り、北面の壁には2mの高さに腰板を貼っています。その腰板は40cm×43cmのパネルを鋲留めして鉄板に似せた意匠を探っています。東部の天井は格縫を東西方向に並べ、鼻に縁型を付けたものです。

柱は仕上げを含めて70cmと太く、耐震的に問題はないと言われています。築64年を経た現在でも



校長室のマントルピース

校舎として使用されており、数少ない戦前の鉄筋コンクリート造校舎として貴重です。

前庭池は半円形の池を東西に並べて中央に道を通したもので、正面の両脇の通用門はアーチ形につくられています。本館だけでなく正門・前庭池の存在により往時の様子をうかがうことができます。

(建築学科 松岡高弘)



正門



前庭池と本館



本館正面詳細

編集後記

10月24・25・26日の3日間、岐阜市で第87回全国図書館大会が開催された。全国から学校および公共などの図書館関係者が一堂に会する大がかりなものである。今年は1,600人以上が参加した。初日は全体会による鼎談(ていだん)、2日目は14のパートに分かれての分科会、3日目は全体によるシンポジウムである。鼎談では、主にIT革命とこれからの図書館のありようについて議論され、シンポジウムでは著作権のことが話題になった。高専の分科会では「図書館を高専教育の中心的存在にするには」というテーマでパネルディスカッションが行なわれた。以前は図書館は学校のなかでもはずれの方の静かなところに建てられていたそうだ。

しかし、現在は図書館を学校の真ん中に建てる傾向にあるということである。初日には表彰式も行なわれ、熊本県の不知火町立図書館が日本図書館協会建築賞を受賞した。本号で近郊の図書館を紹介したが、次回このような企画をするときは、不知火図書館も候補の一つかなと思った。

ところで、高専の分科会は岐阜県図書館で行なわれた。図書館は県民文化の森という広大な敷地に建っていて、開館前にすでに30人くらいの人が列をなしていた。本校の図書館も小粒で地味なりに魅力ある図書館にして、学生が開館を待ちわびるようなものにできないものかと思ったことである。